

# イスラエル アンベールド Vol. 1 「カペナウム」



英語版オリジナル--2016年12月30日公開 : Israel Unveiled

Vol. 1: Capernaum

<https://youtu.be/dvZP42ibrow>

メッセージ by アミール・ツアルファティ

Behold Israel : <http://beholdisrael.org>

「カペナウム」この名は二つのヘブライ語から成っています。カファル (Kfar)ーナホム ( Nahum)、すなわち「ナホムの村。」 興味深いことに、ナホムという語には慰め手という意味があります。それが預言者ナホムのことなのか、この村を築いた人物のことなのかは不明ですが、私たちには分かっていることが一つあります。「慰め」という言葉が、一世紀にこの町に起こったイエスの出現に、しっかり合っているということです。

カペナウムは、紀元前一世紀に、ようやくユダヤ人たちがガリラヤ地方に住むために戻って来たときに作られました。それまでの何百年もの間、ガリラヤ地方にはユダヤ人がいませんでした。この地域を統治していた外国政権がそれを許さなかったからです。ユダヤ人は、第一神殿時代、旧約聖書の時代を通して、ずっとここに住んでいました。実際、ガリラヤ湖の周囲全体は、ユダヤ人の住民で囲まれていました。私のいるこちら側は、二つのヘブライ人部族、ゼブルンの地、ナフタリの地として知られていました。反対側は、ヨルダン川を越えることなく、その地にとどまったガドと、マナセ半部族の地になっていました。興味深いことに、旧約聖書においては、ガリラヤ湖は全体がユダヤ人（北イスラエル王国の人々）に囲まれていたのです。ところが、イエスの時代には様相はすっかり変わっていました。イエスの時代には、ガリラヤ湖岸のユダヤ人たちは、地理的に非常に限られた場所に住み、基本的に、多様な神々を崇拝していた異教徒たちに囲まれていました。ここはデカポリスと呼ばれた地域で、ギリシャ式の十都市から成り、何百という数のギリシャ神が崇拝されていました。その中にはゼウスも含まれ、その祭壇で屠るために豚が飼育されていました。ですから、ここにいたユダヤ人は、異邦人に囲まれていた人たちで、他の地域に住むユダヤ人たちよりも、もっとユダヤ的であることを証明しなければならなかったのです。ガリラヤ地方に住むユダヤ人は珍しい存在だったからです。

紀元前二世紀に、ユダヤのアレクサンダー・ヤナイ王がこの地域にやって来ました。彼は、アッシリア人が来て、ユダヤ人をアッシリアまで追放して以来、数百年にわたってここに住んできた異教徒たちに、二つの選択肢を与えました。この地を離れ、ガリラヤ湖の向こう岸にあった、デカポリスという、ギリシャ人の住んでいたギリシャ式の町々に移り住むか、あるいはここに残るか。ここに残ることを選んだ人たちは、強制的にユダヤ教に改宗させられたのでした。ユダヤ教に改宗するということは、異教の生活習慣を捨て、ユダヤ教を实践することによってユダヤ人になることを意味しました。生まれつきのユダヤ人、ガリラヤ地方に移住するためにユダヤや他の地域から来たユダヤ人は、今や、「ユダヤ人志望者」や「ちょっと微妙なユダヤ人」や「無理やりユダヤ教に改宗させられたユダヤ人」たちと入り混じってしまいました。国内の他のユダヤ人たちからは、「ガリラヤに住んでいるなら、本物のユダ

ヤ人だかどうだか分からない。」と疑問視されるようになりました。そこで、ガリラヤ地方に住むユダヤ人には、いつも厳格な生活習慣を守り、他のユダヤ人よりももっとユダヤ的になって、その正統性を証明しなくてはならないプレッシャーがかかってきました。主にエルサレム出身であった、他のパリサイ人やラビや書士たちからの承認を得るためでした。そのため、現実としては、神のみことばや神の道よりも、宗教や圧迫や伝統の方が優先していきました。ですから、ガリラヤ地方、ガリラヤ湖の周辺では、他の神々を崇拝する異教徒も、自分たちがよりユダヤ的であることを証明するべくプレッシャーを受けているユダヤ人も、宗教と伝統によって非常に抑圧された、宗教的な生活をしていました。彼らは、神のみことばを文字通りに理解することには、あまり関心がありませんでした。そしてそのことは、霊的な闇を生み出します。表向きには何もかも素晴らしいのですが、内側には虚しさがあり、人々は心に闇を抱えていたのです。それは、まさに、マタイの福音書4章にある説明にぴったり当てはまるものです。

「ヨハネが捕えられたと聞いてイエスは、ガリラヤへ立ちのかれた。そしてナザレを去って、カペナウムに来て住まわれた。ゼブルンとナフタリとの境にある、湖のほとりの町である。これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、『ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。』この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。』(マタイの福音書4:12-17)」

イエスはナザレを去って、はるばるカペナウム-カファル・ナホム（慰め手の村）一まで来て滞在されました。イエスは、死の陰にいた人々に、慰めをもたらしたのです。ここは国内でも最も平穏で美しく穏やかな地域です。皆さんがもしガリラヤにいらっしゃることがあっても、この場所が暗く、悪霊に満ちていたとは信じにくいでしょう。しかし、イエスの時代には、霊的に、また場合によっては物理的にも、非常に暗い場所だったのです。そのため、イザヤの言葉は、イエスがガリラヤ地方に来られたことを語る際、非常に興味深い意味を持ってきます。イエスは来られて、暗やみの中にすわっていた人々に、ご自身の光をお見せになりました。イザヤの言葉は、ガリラヤ湖畔の他のどのユダヤ人の町にも当てはまり得ません。マグダラはヨルダン川のほとりにはありませんでした。コラジンはガリラヤ湖岸にはありませんでした。ベツサイダはゼブルンとナフタリの地域にはありませんでした。カペナウムだけが、預言者イザヤが第9章1～2節で言及した基準に相応する町でした。イザヤの預言は、確かに、イエスがカペナウムの町に来られたときに成就されたのです。

イエスはこの場所に来られ、神の、その同じみことばを発せられました。神のみことばは、昨日も、今日も、永遠に変わることがありません。しかし、人々は初めて「神のことば」が、神のみことばを教えているのを聞いたのです。それは、もはや、筆者の言葉でもなく、祭司やラビの言葉でもなく、生ける神のみことばであり、神の民であるべき人々に向けて、神のみことばが、「神のことば」によって、正しく解釈されたものでした。

イエスはベツレヘムでお生まれになりましたが、ナザレで成長されました。イエスはガリラヤ出身のユダヤ人でした。イエスはその文化や慣習、人々のことをご存知でした。彼らにどうやって語り掛ければよいかをご存知でした。イエスは彼らが素朴で、宗教の霊によって苦しめられていることをご存知でした。彼らが毎日のようにそのユダヤ性を疑問視されていたというだけで、自分たちが他のユダヤ人に勝ってユダヤ的であることを証明しなければならないというプレッシャーの下にあったことをご存知でした。イエスはこの地に来られて、

人々を非難することも、咎めることも、人々に怒りを覚えることもありませんでした。イエスは恵みのメッセージと、愛のメッセージと、悔い改めのメッセージを持って来られたのでした。天の御国が近づいているから、悔い改めなければならない、と。イエスは、真理を探し求めている人々であふれている場所に来られます。人々は、厳格な権威下に置かれていたのかもしれませんが、真理に対して飢え渴いていました。イエスは、これらの人々が受けているその教えによって、非常に大きな闇が存在していることを理解しておられます。イザヤ書29章にはこう記されています。

『この民は口先で近づき、くちびるでわたしをさがめるが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれてのことにすぎない。』(イザヤ書29:13)

これが、宗教の霊の実態であり、イスラエルの国は当時も、そして今も、それによって冒されてきたのです。ただ、当時は、ガリラヤは明らかに、それによって著しく苦しめられていました。そこでイエスはここに来て、人々に素晴らしいメッセージを与えておられました。カペナウムは、周囲の他のどの町よりも、多くの奇跡が行われた町でした。聖書には、もしもイエスが行なわれた奇跡をいちいち書きしるすなら、世界も、書かれた書物を入れることができないだろうと、書かれています。(ヨハネの福音書21:25)福音書に記されていることは、おそらく、この地域で行われたイエスの奇跡のほんの2%くらいのものではないのでしょうか。毎朝、イエスは目覚めると、病める人たち、ひどく苦しんでいる人たち、痛みを抱えている人たち、ツアラアト(重い皮膚病)などにかかっていた人たちに向き合わなければなりません。そしてイエスはそれらの人を一人も退けられませんでした。

事実、聖書にはこう書かれています。ひとりのらい病人がイエスのもとに来て、癒しを求めて言いました。「主よ。お心一つで、私をきよめることがおできになります。」すると、イエスは「わたしの心だ。きよくなれ」とおっしゃいました。イエスが、「お前にはその資格がない」と言って撥ねつけたケースは一つもありません。それが、ここ、ガリラヤ湖で行われたイエスのミニストリーの美しさでした。

しかし、時には私たちはあまりにも多くの奇跡を見ると、鈍くなって、現実の神のみことばに対して無関心になってしまうことがあります。奇跡や、超自然的なことが起こることだけを求めてしまい、私たちの人生に対して神が要求なさっていることが、何を意味するものなのかということには、あまり関心がありません。イエスは来られて、とても単純なメッセージ、希望と平安についてのメッセージを説いておられます。しかし、それはすべて、あなたに用意ができていますか、ということにかかってくるものです。「あなたには意義ある人生を送る用意がありますか。」「あなたには、伝統や宗教といった足かせから解き放され、生ける神であるわたし、聖書が示す『道』に従う用意がありますか。」

この地にいた人たちが、本当に精一杯努力していたことは、明らかです。カペナウムの発掘調査で発見されたシナゴグの装飾を見ると、彼らが動物や人間の偶像を何としても避けようとしていたことがわかります。「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない(出エジプト記20:4)」、また「それらを拝んではならない(出エジプト記20:5)」とあるからです。そのため、ユダヤ人はそれらのものを使わないように、ものすごく気を遣っていました。彼らは、ざくろや、花々、オリーブ、ヤシの枝葉など、自然のシンボルを使っていました。しかしながら、私たちの目に留まったのは、幾何学的な図形も用いられていることでした。ダビデの星とか、星形五角形(五芒星形)などが見られます。ダビデの星はユダヤのシンボ

ルであると思われがちですが、イエスの時代には、そうではありませんでした。ダビデの星は、ユダヤの究極的な象徴としては、おそらく、わずか200～300年ほどの歴史しかないでしょう。それは、様々な文化によって、様々な時代に用いられてきた、よくある一般的なシンボルでした。そして、ただ単に、他の像の使用を避けるために、それが使われたのでした。五芒星形は、私たちにとっては、オカルト、異教信仰、悪魔崇拝の象徴となっていますが、当時は、そうではありませんでした。それもダビデの星と同様に、装飾のための幾何学的な図形に過ぎませんでした。興味深いことには、かぎ十字（まんじ）でさえも、今日ではヒトラーやナチスドイツを思い起こさせる、おぞましいシンボルとなっていますが、2000年前にはそうではなかったのです。四世紀や五世紀のシナゴグや教会の床に、かぎ十字の形が認められています。要するに、カペナウムの発掘調査をして、そこでダビデの星を見つけたからと言って、ここがユダヤの町であったと結論付けることはできないのです。

では、常に変わらずユダヤの究極的なシンボルであったものとは、何でしょう。それは、七枝燭台、つまりメノラーです。ご覧のとおり、ここではメノラーのついた円柱の柱頭が見つかっています。その一方にはショーファー（羊の角笛）、反対側には、香の壇から香を取り除くための受け皿が見られます。ヘブル文字の刻まれた円柱もあり、これは確かにイエスの時代のユダヤ人の町にあったシナゴグであると判断されました。ご覧のように、人々はここでかなり質素な生活をしていました。大理石も、石こうも、フレスコも、スタッコ（しっくい）も見つかっていません。シナゴグ自体は、装飾の施された、とても立派な場所であったかもしれませんが、民家はインストラ構造で、中心となる中庭の周りを家々が囲む形になっていました。一つ一つの中庭が、父ゼベダイとその息子たちから成るゼベダイ族などのような、それぞれの氏族の家々で囲まれていました。

ある一つのインストラは、考古学者によって、「インストラ・サクラ（聖なるインストラ）」と名付けられました。そこで、ある重要なものが発見されたからです。その家の一つが、長年にわたって他の家々とは異なる扱いを受けていました。その家は、「家の教会・集会の家（ドムス・エクレスシア）」となっていた可能性が最も高いのです。そして後に四世紀には教会の建物になり、五世紀には美しい八角形の教会の建物となりました。私たちは、その一軒の家が、そんなにも重要な場所となった理由は何だろうかと考えました。それに対するただ一つの答えは、「この家はイエスが滞在した家に違いない。この家はペテロの家だったに違いない」というものでした。聖書によると、イエスはカペナウムではペテロの家に滞在されたからです。シナゴグは美しいものでした。私たちが今日ここで目にするものは、実際にはイエスの時代のもではありません。それは、イエスの時代にあったものの上に建てられています。イエスの時代のもは、石灰岩のかわりに玄武岩で造られていましたが、現在のものに劣らず大きく、立派なものであったと考えるのに十分な根拠があります。ですが、神は大きな建物や、シナゴグや教会、神殿などには関心を持っていらっしゃいません。神は信仰に目を向けられます。この場所には、信仰が見つけたのでしょうか。どうやら見つからなかったようです。私たちが今日、今も存在している活気に満ちた町ではなく、廃墟となったカペナウムを訪れているのは非常に残念なことです。聖書には、イエスがカペナウムをその信仰の欠如のために叱責された、と書いてあります。マタイの福音書11章20節に、こうあります。

**「それから、イエスは、数々の力あるわざの行なわれた町々が悔い改めなかったので、責め始められた。（マタイの福音書11:20）」**

そして同23～24節には、次のように書かれています。

「カペナウム。どうしておまえが天に上げられることがありえよう。ハデスに落とされるのだ。おまえの中でなされた力あるわざが、もしもソドムでなされたのだったら、ソドムはきょうまで残っていたことだろう。しかし、そのソドムの地のほうが、おまえたちに言うが、さばきの日には、まだおまえよりは罰が軽いのだ。」(マタイの福音書11:23-24)」

イエスがカペナウムの町に対して予告された裁きは、なんと厳しいものだったでしょう。それはイエスの怒りのためではなく、彼らの不信仰のためでした。「アミールさん、もしも私がイエスの時代に生きて、イエスのしたことをこの目で見たなら、私も信じたことでしょう。」と言う人たちがいます。私は決まってこう答えます。「まず第一に、聖書には、信仰とは目に見えるものではなく、目に見えないものを確信させるものであると書かれていますよ。(ヘブル人への手紙11章)」私はまた付け加えてこう言います。「ガリラヤ湖の周りには至る所に廃墟となった町々があります。彼らは信じなかつたので、神の裁きを受けたのです。彼らは何千件という奇跡を見ました。にもかかわらず、信じなかつたのです。ですから、見ることは信じることではありません。信じるというのは、実際は、真実であると知り、まだ見ていないものを対象にするのです。私たちには、宗教の霊がいかにかこの地の人々を冒していたかが分かっています。イエスは宗教を求めてはおられませんでしたが、イエスは、それらの人々が持っているべきであったはずの生ける神との関係を求めておられました。イエスは信仰を求めておられました。ご自身への信仰、ご自身が十字架の上で完成された働きへの信仰、いずれは義を生み出す信仰です。聖書には、「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方(キリスト・イエス)にあつて、神の義となるためです(コリント人への手紙第二5:21)」とあります。

ですから、良い働きを生み出すことのできる義は、私たちが信じること、イエスに信仰を置くことによってのみ、得られるものなのです。ここに住んでいた人たちも、今日ある人々も、人々は、良い行いをすれば、天国での点数稼ぎができるかと本気で考えています。神がそれらの良い行いや良い業を目に留めて天秤にかけておられ、いつの日か、それらが自分の犯した悪い行いの重さを上回るだろうと思っているのです。しかし、それは間違っています。聖書は、詩篇14章や53章を始め、その他数多くの詩篇の中で、こう告げています。

「主は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。彼らはみな、離れて行き、だれもかれも腐り果てている。善を行なう者はいない。ひとりもない。(詩篇14:2-3)」

自分の良い行いが何の得にもならないとは、恐ろしいことです。でも、それが良い知らせなのです。イエスは来られて、人々におっしゃいます。「頑張るな。無理だから。」イエスは私たちに、道と、真理と、いのちを与えてくださろうとしています。イエスは、宗教的抑圧で非常に苦しんでいた地に来られたのでした。イエスは暗やみだった地に来られたのです。聖書には、「死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った(マタイの福音書4:16)」と書かれています。世の光であり、太陽が造られるよりも前におられたお方が、この暗やみの地に来られ、光をともしました。イエスに従った人たちは誰でも、その光を見ることができました。それを見て理解し、メッセージを受け取った人たちは皆、磁石のようにイエスに惹かれ、それ以来彼に従ったのでした。悲劇的だったのは、カペナウムの大半の住民は、非常に多くの奇跡を見たにも関わらず、どうしても信じなかつたことです。彼らはあまりにも宗教の霊に冒されていたために、見せかけさえ良ければ、信じる者であるかどうかということは、彼らには重要なことではありませんでした。

さて、私たちはどうでしょう。宗教熱心でしょうか。私たちも、自分なりの「カペナウム」に住んでいないでしょうか。この町の破滅状態を見ると、良い行いや、良い志、良い心、良い見解といったものによって何にたどり着くことのできるのかが分かります。善を行う者はひとりもいません。人の心は悪で満ちています。私たちは、見せかけは、優れた善行者とか、平和を作る者などになれるが、それは実際には価値のないことです。私たちには、信じる必要があるのです。私たちは、私たちのために、私たちに代わって捧げられた究極のいけにえを信じなければなりません。そうすれば、神は私たちをもはや罪人としてではなく、キリスト・イエスにある神の義として見てくださるのです。

最後に、ローマ人への手紙第3章21～26節にある、尊いみことばを以て締めくくりたいと思います。

「しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。(ローマ人への手紙3:21-26)」